

知的障害のあるグループホーム利用者に対する 行動的 QOL 向上を目指した支援

Support for improving the Behavioral QOL of individual with intellectual disability in group home

○寺川和志・中鹿直樹

○Kazushi Terakawa, Naoki Nakashika

立命館大学大学院人間科学研究科・立命館大学総合心理学部

Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University,

College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University

Key words : 行動的 QOL, 応用行動分析, グループホーム

I. 問題と目的

行動的 QOL とは、個人の生活の質を正の強化で維持される行動の選択肢の数によって評価する概念である(望月, 2001)。個人と環境の相互作用である行動そのものを測定することで、これまでの QOL 指標が抱える、物理社会的要因の測定と個人の主観的な満足度の測定に二元化されているという問題点を解消できる。該当グループホーム(以下、GH)では、以前から利用者における行動の選択肢拡大を目指していた一方で、施設全体として具体的な取り組みはできていない状態であった。

本研究の目的は、GH 職員に対する、1) 行動的 QOL の説明、2) 支援記録のフィードバック、3) 支援会議の実施によって、知的障害のある GH 利用者の行動的 QOL を向上させることである。

II. 方法

参加者 知的障害のある GH 利用者 1 名と、アルバイト職員の世話人 3 名(以下、職員 A, B, C)であった。

従属変数 正の強化で維持される行動の選択肢の数であった。具体的指標として、職員が利用者を褒めた(肯定的な声かけをした)回数、職員が考える利用者の「できる」ことの数、利用者に見られた新たな機能を持つ行動の数を設定し、上記 3 点を各職員が記録した。

設定 GH でアルバイト職員として 1 年半勤務する著者が研究を実施した。記録場面は、利用者が GH で生活する約 17 時間(16 時から翌朝 9 時)であり、買い物、食事等の場面を含んだ。

手続き 職員 3 名に対して、ベースライン(以下、BL)・介入 1・介入 2・介入 3 と、多層 BL デザインで介入を実施した。介入 1 では、研究実施者が各職員に対して、行動分析学における行動の考え方、行動的 QOL、援助つきの「できる」という捉え方の 3 点を説明した。介入 2 では、実験実施者が各職員に対して、これまでの記録内容を図表にまとめて、2 度フィードバックを行った。介入 3 では、GH において支援会議を設定し、支援に関する情報共有を行った。

III. 結果と考察

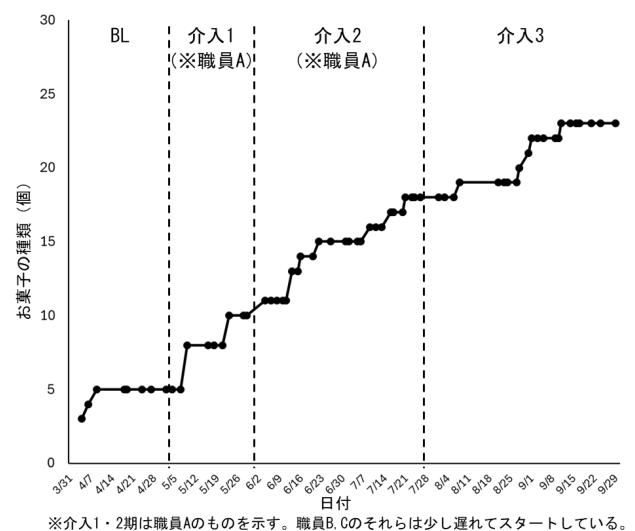


図1. 選択したお菓子の種類数の累積グラフ

正の強化で維持される行動の選択肢の具体的な結果として、利用者が選択したお菓子の種類数の累積グラフを図1に示した。GH では、利用者の希望があった場合、利用者が自ら選択したお菓子を購入する取り組みを行っていた。選択したお菓子の種類は、BL 時の 5 種類から、介入が進むに伴って、23 種類まで増加した。

また、職員の間で、利用者の要求や選択等の行動的 QOL に関する情報共有が増加した。具体的には、日誌において利用者の「できる」ことに注目した記録の増加、社内 SNS において行動的 QOL に関するやり取りの増加が見られた。それらの情報共有により、利用者が要求した昼食を準備すること、利用者が要求した飲み物を購入すること、利用者が余暇時間に見たいと要求したビデオを借りに行くこと等が可能となった。

つまり、職員の行動が変化することで、利用者の正の強化で維持される行動の選択肢が拡大したと考えられる。

IV. 引用文献

望月 昭 (2001). 行動的 QOL : 「行動的健康」へのプロアクティブな援助 行動医学研究, 7, 8-17.